

栄養士養成課程2年生の栄養士に対する意識について

—進路・コンピテンシーとの関連—

Attitudes toward Dietitians among Second-Year Dietician Training Program Students

—Relationships with Career Paths and Competencies—

鎌田 久子¹, 田口 裕基¹, 富永 暁子¹, 堀口 美恵子¹

¹大妻女子大学短期大学部

Hisako Kamata¹, Yuuki Taguchi², Akiko Tominaga, and Mieko Horiguchi¹

¹ Otsuma Women's University Junior College Division

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：栄養士，進路，コンピテンシー

Keywords：Dietitians, Career paths, Competencies

抄録

栄養士養成課程2年生の栄養士に対する意識，成長度，卒業後の進路，コンピテンシーの関連を検討し，今後の学習指導・支援やカリキュラムの改善に活かしていくことを目的として，webによるPROGテストおよびアンケート調査を行った。

成長度高群は低群よりも栄養士基本コンピテンシー得点が有意に高く，卒業後進路の栄養士職群は栄養士職以外群よりも栄養士基本コンピテンシー得点が有意に高かった。栄養士という職業に就くことを誇りに思う群の栄養士職の人数は有意に多かった。「自分は栄養士に向いていると思う」（自己確信）は對自己基礎力と中程度の正の相関が認められた。

2年間の栄養士養成課程の学びの中で，栄養士としての自己確信は低めではあったが，意欲，自己確信，価値観，態度は育まれることが示唆された。特に，自分の成長を高く評価できる学生や栄養士職として就職するに至った学生では，栄養士としての意欲，自己確信，価値観，態度が高いことが示唆された。一方，栄養士としての価値観は，卒業後の進路に影響する要因の1つと考えられた。これらのことから，今後の学生指導・支援やカリキュラム改善での検討課題として栄養士としての自己確信や価値観の向上が挙げられる。その対策として，對自己基礎力を磨く体験の場を授業や課外活動に取り入れ，現役栄養士から仕事のやりがいや聞く機会をつくるなどが考えられる。

1. 諸言

近年，日本の大学教育においてジェネリックスキルは注目され，ジェネリックスキルを測定する方法の1つとしてPROGテストが用いられている^[1]^[2]。PROGは，学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発したジェネリックスキルの測定と育成の両面から支援するプログラムである^[3]。PROGテストは，「知識を活用して課題を解決する力」と定義されるリテラシーと「自分を取り巻く環境に実践的に対処する力」と定義されるコンピテンシーから構成されている。リテラシーは，問題解決のプロセスに不可欠な「情報収集力」「情報

分析力」「課題発見力」「構想力」の4つの要素で測定・評価している。コンピテンシーは，周囲の環境と良い関係を築く力（経験を積むことで身に付いた行動特性で，経験を振り返り意識して行動することで育成される）であり，「対人基礎力」「對自己基礎力」「対課題基礎力」の3軸に分けて，実社会の若手リーダー層の行動特性と比較判定することで測定・評価している^[3]。対人基礎力は，親和力（親しみやすさなどの6つの要素を含む），協働力（役割理解・連携行動などの4つの要素を含む），統率力（話し合うなどの4つの要素を含む）で構成されている。對自己基礎力は，感情制御力（セル

フアウェアネスなど3つの要素を含む)、自信創出力(独自性理解など3つの要素を含む)、行動持続力(主体的行動など3つ要素を含む)で構成されている。対課題基礎力は、課題発見力(情報収集など3つの要素を含む)、計画立案力(目標設定など4つの要素を含む)、実践力(実践行動など3つの要素を含む)で構成されている。

PROG テストを用いた先行研究では、Project Based Learning (PBL) の経験や学内活動でのリーダー経験とジェネリックスキルとの関連^[1]、ジェネリックスキルと成績や就職との関連^[2]、PBL 科目選択とコンピテンシーとの関連^[4]、地域における食育活動と社会人基礎力との関連^[5]などが検討されている。

管理栄養士養成課程の学生を対象とした研究で、永井ら^[6]は、コンピテンシーという用語を「高い業績を出す個人の行動特性」という意味で用い、卒業レベルの管理栄養士のコンピテンシー測定項目(基本コンピテンシー4項目、共有コンピテンシー29項目、職域コンピテンシー7項目)を開発した。赤松ら^[7]は、管理栄養士4年次学生を対象としてこの測定項目を用いた調査の結果から、基本コンピテンシーの高さが卒業研究、国家試験受験予定、就職内定に関連していることを示した。一方、川崎ら^[8]では卒業進路別の管理栄養士のコンピテンシーに有意差は認められなかった。長幡ら^[9]はこの測定項目を用いて学生のコンピテンシー到達度を評価し、基本コンピテンシーは共通コンピテンシーや職業別コンピテンシーより到達度が高いことを示した。永井ら^[10]は卒業10年以内の管理栄養士のコンピテンシー到達度は、経験年数と養成教育のカリキュラムが関連する可能性を示唆した。栄養士のコンピテンシーに関する研究では、西村^[11]が永井ら^[6]の管理栄養士の基本コンピテンシー4項目を参考にして、栄養士の職業意識4項目として用い、職業意識の高い群は献立に対する意識や食生活への意識が高いことを示唆した。このように管理栄養士のコンピテンシーについては学生や社会人を対象に研究されているが、栄養士のコンピテンシーについては散見された。栄養士養成課程2年間の学びでの成長度、栄養士としてのコンピテンシー、栄養士職での就職などの関連を検討することは、栄養士養成課程のカリキュラムの見直しや学生支援のための有効な資料になると考えられる。

本研究では、これまであまり検討されていない栄養士養成課程の学生における卒業前の栄養士の基本コンピテンシーに着目し、試みとしてPROGテストで測定できるコンピテンシーとの関連を検討したい。また、同じく探索的な試みとして、2年間の学びで学生自身の認識した成長度や卒業後の進路との関連も検討したい。そこで、本研究の目的は、栄養士養成課程2年生の栄養士としての基本コンピテンシー、ジェネリックスキルとしてのコンピテンシー、成長度、卒業後の進路の関連を検討し、今後の学習指導・支援やカリキュラムの改善に活かしていくこととした。

2. 方法

2.1 調査対象と手続き

東京都内の栄養士養成施設(2年制)で学ぶ学生を対象に、2021年11月中旬(1年生)および12月中旬から1月上旬まで(2年生)の期間にWebによるPROGテストおよびアンケート調査を実施した。オプトアウトで行うため、PROGテスト結果とアンケート結果を研究に用いることへ承諾を問う項目を設け、承諾した学生のデータのみを本研究に用いた。調査参加者は女性139名で、回収数は139であった。このうち、承諾が得られた有効回答数は134(有効回答率96.4%)で、2年生65名、1年生69名であった。

本研究の分析対象者は、2年生65名であるが、栄養士に対する意識の因子分析においては、サンプル数100以上であることが望ましく、かつ、栄養士養成課程の学生に対する尺度として検討したため、分析対象を1・2年生合計の134名とした。

2.2 調査内容

(1) 栄養士に対する意識

永井ら^[6]が開発した管理栄養士の卒業教育レベルのコンピテンシー40項目のうち、基本コンピテンシー4項目は意欲、自己確信、価値観、態度にそれぞれ対応していると述べている。この4項目を参考に、栄養士に対する意識として「食を通じて人々の健康と幸福に貢献したいと思う」(意欲)、「栄養士という職業に就くことを誇りに思う」(価値観)、「栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたいと思う」(態度)、「自分は栄養士という職業に向いていると思う」(自己確信)という4項目を作成して用いた。「全く思わない」(1点)「そ

う思わない」(2点)「どちらともいえない」(3点)「そう思う」(4点)「かなり思う」(5点)の5件法で回答を求めて得点化した。

(2) 自分の成長度

入学から現在までに学生自身がどの程度成長したと認識しているかについて、『入学時を0(ゼロ)、自分の理想とする卒業時の状態を10とした場合、「現在の自分の成長度」にあてはまる数字を1つ選んでください。』という項目を設けた。回答された数字を成長度として用いた。

(3) 入学時と卒業後の進路

入学時の進路については、「卒業後に栄養士として働きたいと考えていましたか。」という項目について、「考えていた」「少し考えていた」「どちらとも言えない」「あまり考えていない」「考えていない」の5件法で回答を求めた。

卒業後の進路については、就職・栄養士職(保育所, 高齢者施設, 病院, 学校, 会社事業所, その他), 就職・栄養士職以外(営業職・販売, 事務職, その他), 編入・進学, 未決定, その他などの選択肢で回答を求めた。

(4) PROGテストのコンピテンシー

株式会社リアセックにより提供されたWebによるPROGテストを行い, 本研究ではコンピテンシーの結果を用いた。コンピテンシーは, 対人基礎力, 對自己基礎力, 対課題基礎力の3つで構成され, 1~7点で点数化された。

2.3 分析方法

各変数の差の検定では, t 検定, χ^2 検定を用いた。分析は, 統計ソフトIBM SPSS Statistics 24.0を使用した。

2.4 倫理的配慮

調査協力者に対する承諾や分析対象者となる学生個人の人権擁護(自由意思, 無記名, データ保管等), 研究等によって生じる個人への不利益および危険性に対する配慮等について大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の審査を受け, 承認を得て実施した(受付番号: 03-020)。

3. 結果

3.1 栄養士に対する意識

栄養士養成課程2年生65名の栄養士に対する意識4項目の回答について, 各選択肢の人数と割合を表1に示す。「食を通じて人々の健康と幸福に貢献したい」と思っていたのは92.3%で, 「栄養士として専門的な知識と技術を向上させたい」と思っていたのは81.5%であった。一方, 「栄養士という職業に就くことを誇りに思う」と思っていたのは63.1%で, 「栄養士という職業に向いている」と思っていたのは36.9%であった。

栄養士に対する意識4項目を用いた探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)は, 1・2年生全体134名を対象に分析を行った。その結果, 1因子4項目が抽出され, 負荷量は0.52以上であった(表2)。この尺度を栄養士基本コンピテンシーと命名した。

Cronbachの α 係数を算出した結果, $\alpha=0.71$ と十分な値が得られ, 内的整合性が確認された。そこで, 栄養士に対する意識の4項目の合計得点を栄養士基本コンピテンシー得点とした。

2年生の栄養士に対する意識4項目の各平均値と, 栄養士基本コンピテンシー得点の平均値は表3に示した通りであった。

表1. 栄養士に対する意識4項目の人数と割合

		かなり思う	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	全く思わない
食を通じて人々の健康と幸福に 貢献したいと思う	人数(人)	29	31	5	0	0
	割合(%)	44.6	47.7	7.7	0.0	0.0
自分は栄養士という職業に向いて いると思う	人数(人)	4	20	25	14	2
	割合(%)	6.2	30.8	38.5	21.5	3.1
栄養士という職業に就くことを誇り に思う	人数(人)	11	30	19	4	1
	割合(%)	16.9	46.2	29.2	6.2	1.5
栄養士として専門的な知識と技術 を向上させたいと思う	人数(人)	24	29	9	3	0
	割合(%)	36.9	44.6	13.8	4.6	0.0

表 2. 栄養士基本コンピテンシーの因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

項目	F1
食を通じて人々の健康と幸福に貢献したいと思う	0.52
自分は栄養士という職業に向いていると思う	0.56
栄養士という職業に就くことを誇りに思う	0.70
栄養士として専門的な知識と技術を向上させたいと思う	0.68

n=134

表 3. 各変数の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
食を通じて人々の健康と幸せ幸福に貢献したいと思う	4.37	0.63
自分は栄養士という職業に向いていると思う	3.15	0.94
栄養士という職業に就くことを誇りに思う	3.71	0.88
栄養士として専門的な知識と技術を向上させたいと思う	4.14	0.83
栄養士基本コンピテンシー	15.37	2.35
自分の成長度	5.97	1.52
対人基礎力	3.42	1.55
對自己基礎力	3.22	1.49
対課題基礎力	3.52	1.55

n=65

表 4. 成長度 2 群別 t 検定結果

	成長度	人数	平均値	標準偏差	t値 (df)
栄養士基本コンピテンシー	低群	22	14.36	2.34	-2.575 ** (63)
	高群	43	15.88	2.21	
対人基礎力	低群	22	3.32	1.49	-0.359 (63)
	高群	43	3.47	1.59	
對自己基礎力	低群	22	3.18	1.47	-0.129 (63)
	高群	43	3.23	1.52	
対課題基礎力	低群	22	3.55	1.63	0.082 (63)
	高群	43	3.51	1.53	

**p < .01

3.2 自分の成長度

表 3 に示した通り, 自分の成長度の平均値は, 5.97 (SD 1.52) であった. また, 最小値は 2, 最大値は 8 であった. 成長度の平均値以上を成長度高群, 平均値未満を成長度低群とし, この 2 群間の各変数の t 検定を行った (表 4).

その結果, 2 群間で有意差が認められたのは栄養士基本コンピテンシーで, 成長度高群は低群よりも有意に高かった ($t(63)=2.58, p<0.01$).

各変数間の相関分析の結果 (表 5), 成長度は栄養士基本コンピテンシーと中程度の正の相関が認められた ($r=0.47, p<0.01$). また, 栄養士に対する意識の 4 項目うち, 「自分は栄養士に向いていると思う」は對自己基礎力と中程度の正の相関が認められた ($r=0.32, p<0.01$).

3.3 入学時と卒業後の進路

入学時に栄養士として働きたいと考えていた学生は 56 名 (86.2%) であった. 調査の時点 (12 月中旬から 1 月上旬) で卒業後の進路が栄養士職の就職に決まっていた者は 45 名 (69.2%) であった. 卒業後に栄養士職で就職する群とそれ以外の群の 2 群に分け, 2 群間の各変数の t 検定を行った. その結果, 2 群間で有意差が認められたのは栄養士基本コンピテンシーで, 栄養士職群は栄養士職以外群よりも有意に高かった ($t(63)=4.48, p<0.01$) (表 6).

表 5. 各変数間の相関係数

	栄養士基本コンピテンシー	食を通じて健康と幸福に貢献したい	自分は栄養士に向いていると思う	自分は栄養士に就くことを誇りに思う	栄養士として専門的な知識と技術を向上させたい	対人基礎力	對自己基礎力	対課題基礎力
自分の成長度	0.47 **	0.18	0.39 **	0.38 **	0.36 **	-0.01	0.04	-0.05
栄養士基本コンピテンシー		0.58 **	0.73 **	0.79 **	0.75 **	-0.03	0.12	0.01
食を通じて健康と幸福に貢献したい			0.25 *	0.34 **	0.23	0.02	-0.02	0.07
自分は栄養士に向いていると思う				0.36 **	0.35 **	0.19	0.32 **	0.07
自分は栄養士に就くことを誇りに思う					0.51 **	-0.08	0.05	-0.06
栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたい						-0.22	-0.06	-0.06
対人基礎力							0.68 **	0.42 **
對自己基礎力								0.42 **

n=65, **p < .01

栄養士に対する意識の4項目の回答が「かなり思う」「そう思う」を思う群、「どちらともいえない」「そう思わない」「全く思わない」を思わない群の2群に分け、各項目の卒業後の進路2群の人数を確認した。栄養士という職業に就くことを誇りに思う群の栄養士職の人数は有意に多く、思わない群の栄養士職以外の人数は有意に多かった

($p=0.002$)。栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたいと思う群の栄養士職の人数は有意に多い傾向があり、思わない群の栄養士職以外の人数は有意に多い傾向であった($p=0.052$) (表7)。

表6. 卒業後進路度2群別 t 検定結果

	卒業進路	人数	平均値	標準偏差	t値 (df)
食を通じて健康と幸福に貢献したい	栄養士職	45	4.49	0.63	2.512 * (41.09)
	栄養士職以外	20	4.10	0.55	
栄養士という職業に向いている	栄養士職	45	3.38	0.89	3.067 ** (63)
	栄養士職以外	20	2.65	0.88	
栄養士という職業に就くことを誇りに思う	栄養士職	45	3.93	0.78	3.342 ** (63)
	栄養士職以外	20	3.20	0.89	
栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたい	栄養士職	45	4.33	0.67	3.026 ** (63)
	栄養士職以外	20	3.70	0.98	
栄養士基本コンピテンシー	栄養士職	45	16.13	2.06	4.482 ** (63)
	栄養士職以外	20	13.65	2.06	
対人基礎力	栄養士職	45	3.33	1.52	-0.637 (63)
	栄養士職以外	20	3.60	1.64	
対自己基礎力	栄養士職	45	3.27	1.59	0.412 (63)
	栄養士職以外	20	3.10	1.29	
対課題基礎力	栄養士職	45	3.58	1.62	0.423 (63)
	栄養士職以外	20	3.40	1.43	

** $p < .01$, * $p < .05$

表7. 栄養士に対する意識別の卒業後の進路の人数

	卒業後の進路	卒業後の進路		χ^2 値	p値
		栄養士職	栄養士職以外		
食を通じて健康と幸福に貢献したい	思う	42	18	0.00	1.000
	思わない	3	2		
栄養士という職業に向いている	思う	20	4	3.55	0.059
	思わない	25	16		
栄養士という職業に就くことを誇りに思う	思う	34	7	9.78	0.002
	思わない	11	13		
栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたい	思う	40	13	3.78	0.052
	思わない	5	7		

3.4 PROG テストのコンピテンシー

表3に示す通り、対人基礎力の平均値は3.42(SD 1.55)、対自己基礎力の平均値は3.22(SD 1.49)、対課題基礎力の平均値は3.52(SD 1.55)であった。

成長度2群別のt検定(表4)および卒業後進路2群別のt検定(表6)では、対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力のいずれについても有意差は認められなかった。

株式会社リアセックから提供された2020年から2021年度のコンピテンシー得点の平均値(表8)と本研究の分析対象者の平均を比べると、対人基礎力得点、対課題基礎力得点は、短期大学2年の平均値よりは高く、四年制大学2年生の平均値に近い数値であった。また、対自己基礎力得点は短期大学2年(食物栄養学系)の平均値よりは高い数値であった。

表8. 2020~2021年度コンピテンシー得点の平均値

	学校数	サンプル数	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力
四年制大学2年	202	47,708	3.41	3.35	3.48
短期大学2年	69	18,826	3.35	3.24	3.19
短期大学2年(食物栄養学系)	20	2,762	3.18	3.16	3.17

※この表は株式会社リアセックより提供されたデータにより作成

4. 考察

4.1 栄養士に対する意識と進路の関係

栄養士に対する意識4項目の平均値と栄養士基本コンピテンシーの平均値は、西村^[11]で示された結果と同程度であった。卒業後の進路で栄養士職として就職をする学生は、それ以外の学生よりも栄養士基本コンピテンシーが高かった。校外実習前後の比較では有意差が認められなかったが^[11]、調査の時点(12月中旬から1月上旬)では卒業後の進路がほぼ決定しており、2年次の学びもほぼ終えている時期である。そのため、栄養士職で就職をしない学生より栄養士職で就職する学生の栄養士基本コンピテンシーが高まっていたと考えられる。本研究では、栄養士に対する意識の4項目のうち「食を通じて人々の健康と幸福に貢献したいと思う」(意欲)、「栄養士という職業に就くことを誇りに思う」(価値観)、「栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたいと思う」(態度)は高い点数で、「自分は栄養士という職業に向いていると思う」(自己確信)が一番低い点数であり、長幡ら^[9]の管理栄養士養成課程の学生の卒業時点の結果と同様であった。このことから、2年間の栄養士養成課程においても、栄養士としての意欲、価値観、態度は生まれ、特に栄養士職として就職するに至った学生では高まったことが示唆された。4つの項目の中で平均値が最も低かった自己確信をいかにして高めるかは、今後の学生指導・支援やカリキュラム改善で検討すべき課題の1つといえるであろう。栄養士として必要な専門的学びを、学

生が将来に活かしていく自信につなげるためには、実践的に学べる実験・実習科目で、学生自身が達成感や自分にもできるという肯定感を得られるような工夫を取り入れることは重要と考えられる。

一方、卒業後の進路として栄養士職に就くことに影響した要因では、表7の結果から、特に「栄養士という職業に就くことを誇りに思う」ことが重要であると考えられる。このことから、就職活動を開始する以前の1年次に、本専攻を卒業した現役の先輩栄養士から、栄養士の仕事のやりがいや意義について、実感のこもった話を聞ける多くの機会を設けるなどの方法で支援していくことが重要と考えられる。

4.2 栄養士基本コンピテンシーと成長度との関係

学生の成長度の平均値は5.97 (SD 1.52) となり、10段階の半ばであったことから、理想としていた卒業時の状態にはまだ到達していないと考えている学生が少なくない。このことから、まだ成長途中であり、今後も成長する必要があることを学生自身が自覚していることが推察される。成長度の高い群は栄養士基本コンピテンシー得点が高く、自分の成長を高く評価できる学生は、栄養士としての意欲、自己確信、価値観、態度が高まっていると考えられる。

4.3 コンピテンシー（対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力）

本研究の分析対象者の対人基礎力得点、対課題基礎力得点の平均値は、全国の短期大学2年生（69校、18,826名）と短期大学2年生（食物栄養系）（20校、2,762名）の平均値より高めで、全国の四年制大学2年生（202校、47,708名）に近い得点であった。特に対課題基礎力得点は、全国の四年制大学および短期大学の2年生の平均値より高めであった。対課題基礎力は課題発見力、計画立案力、実践力で構成されている^[3]。本研究対象の栄養士養成課程では、栄養士としての実践力を確実に身につけるため、実験・実習科目を充実させている。特に献立作成、食材調達、調理作業などの計画から実施までを学生自身が行う給食管理実習では、計画、実施、評価、改善を1年間繰り返し行っているため、学生達はPDCAサイクルを実践することができている。このようなグループワークで

は、課題を発見して解決していく力を育むことができ、対課題基礎力を高める要因の1つになっていると考えられる。

対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力は、成長度や進路との関連は認められなかった。一方、「自分は栄養士に向いていると思う」（自己確信）は対自己基礎力と中程度の正の相関が認められた。対自己基礎力は感情制御力、自信創出力、行動持続力で構成されている^[3]。つまり、「ストレスのかかる場面でも自分の感情を把握した上で状況を前向きに捉え困難に挑戦していく力」、「自分の強み弱みを理解して自信をもっていると同時に機会を捉えて自分を向上させようとする力」、「自分なりのルールを作り最後まで粘り強く責任を持って継続して取り組む力」という3つの力^[12]が育まれると、栄養士としての自己確信は高まることが示唆された。対自己基礎力を磨いていくことは、前項で課題として挙げた栄養士としての自己確信を高めるための対策の1つになると考えられる。その方法として、困難な状況でもストレスをうまく処理し、常に学ぶ姿勢をもってチャレンジし、自己と向き合って粘り強くやり遂げられるような様々な体験の場を各科目の中で取り入れて、学生の力を伸ばすサポートをしていくことが考えられる。また、食育ボランティア活動にリーダー的な役割を果たすことでコンピテンシーが高くなることが示唆されており^[5]、地域社会での食育ボランティア活動など体験的な学びの場を増やし、学生がより積極的に活動に関われるようにすることは、コンピテンシーを高める重要なサポートになると考えられる。

4.4 研究の限界と今後の展望

本研究は、これまであまり検討されていない栄養士基本コンピテンシーに着目し、試みとしてPROGテストで測定できるコンピテンシーとの関連や、卒業後の進路との関連を検討した。分析対象者が、1校の栄養士養成課程2年生65名であり、数量的情報は十分ではなかったという限界はあるものの、栄養士基本コンピテンシーと卒業進路との関連や、対自己基礎力と栄養士としての自己確信との関連が示唆された。今後も継続的に研究を行い、栄養士養成課程の学生の対象人数を増やしたり、経時的に学年による変化を見るなどさらに詳しく検討していきたい。

引用文献

- [1] 宮脇啓透ほか. 学士(経営学)課程教育における学習効果の測定-ジェネリックスキルの直接評価得点と学内活動との相関分析-. 昭和女子大学現代ビジネス研究所紀要. 2018, 3, p. 1-9.
- [2] 亀野淳. 大学生のジェネリックスキルと成績や就職との関連に関する実証的研究 : 北海道大学生に対する調査結果を事例として. 高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習. 2017, 24, p. 137-144.
- [3] 株式会社リアセック. “PROG テストについて”. PROG テストについて.
https://www.riasec.co.jp/prog_hp/, (参照 2022-3-15).
- [4] 栗津俊二ほか. 能動的学修科目を選択する学生の特性 -PBL 科目を選ぶ動機とコンピテンシー-. 実践女子大学人間社会学部紀要. 2017, 13, p. 29-39.
- [5] 西田江里ほか. 地域食育活動の企画・実施が栄養士養成課程在学生の学習意欲および社会人基礎に及ぼす影響. 長崎短期大学研究紀要. 2019, 31, p. 59-63.
- [6] 永井成美ほか. 卒前教育レベルの管理栄養士のコンピテンシー測定項目の開発. 栄養学雑誌. 2012, 70(1), p. 49-58.
- [7] 赤松利恵ほか. 管理栄養士に関する基本コンピテンシーの高い学生の特徴 -卒業年次の学生の自己評価による調査結果の解析-. 栄養学雑誌. 2012, 70(2), p. 110-119.
- [8] 川崎靖子ほか. 管理栄養士養成課程の学生における管理栄養士コンピテンシーの到達度と職業選択との関係. 川崎医療福祉学会誌. 2020, 30(1), p. 285-293.
- [9] 長幡友実ほか. 管理栄養士養成課程学生の卒業時点におけるコンピテンシー到達度. 栄養学雑誌. 2012, 70(2), p. 152-161.
- [10] 永井成美ほか. 実践経験 10 年以内の管理栄養士の専門的実践能力-コンピテンシー測定項目を用いた到達度評価-. 日本栄養士会雑誌. 2013, 56(2), p. 98-109.
- [11] 西村美津子. 栄養士校外実習における職業意識向上への関連要因. 山陽学園短期大学紀要, 2014, 45(0), p. 1-10.
- [12] 株式会社ピックアンドミックス. “ジェネリックスキル開発状況セルフチェックシート”. PROG の教化書 ver. 10.
<https://pickandmix.co.jp/prog/ebook/HTML5/pc.html#/page/1>, (参照 2022-3-15).

Abstract

This study aimed to examine the relationship between attitudes toward dietitians, degree of growth, post-graduation career paths, and competencies of second-year dietitian training program students, and the results will be used to improve the curriculum and learning support in the future. We conducted a web-based PROG test and questionnaire survey. Dietitians' elementary competency scores were significantly higher in the dietitian job group than in the non-dietitian job group. "I think I am suited to be a dietitian" (self-confidence) was moderately positively correlated with personal skills. It was suggested that students' self-confidence in themselves as dietitians was low, but the motivation, values, and attitudes of dietitians are developed during the two-year dietitian training program and are particularly high among students who find employment as dietitians. On the other hand, values as a dietitian were considered to be one of the factors that influence students' career paths after graduation. Improving self-confidence and values as a dietitian is an issue to be considered in future learning support and curriculum improvement, and measures to address this issue include incorporating opportunities for experiences that enhance personal skills into classes and extracurricular activities and hearing about the rewards of working from dietitians in the field.

(受付日 : 2022 年 6 月 3 日, 2022 年 9 月 12 日)

鎌田 久子 (かまた ひさこ)

現職：大妻女子大学短期大学部家政科食物栄養専攻 准教授

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程生涯発達科学専攻修了。

専門は給食管理論。主に食事づくり行動に関する研究や学生の献立作成能力に関する研究を行っている。